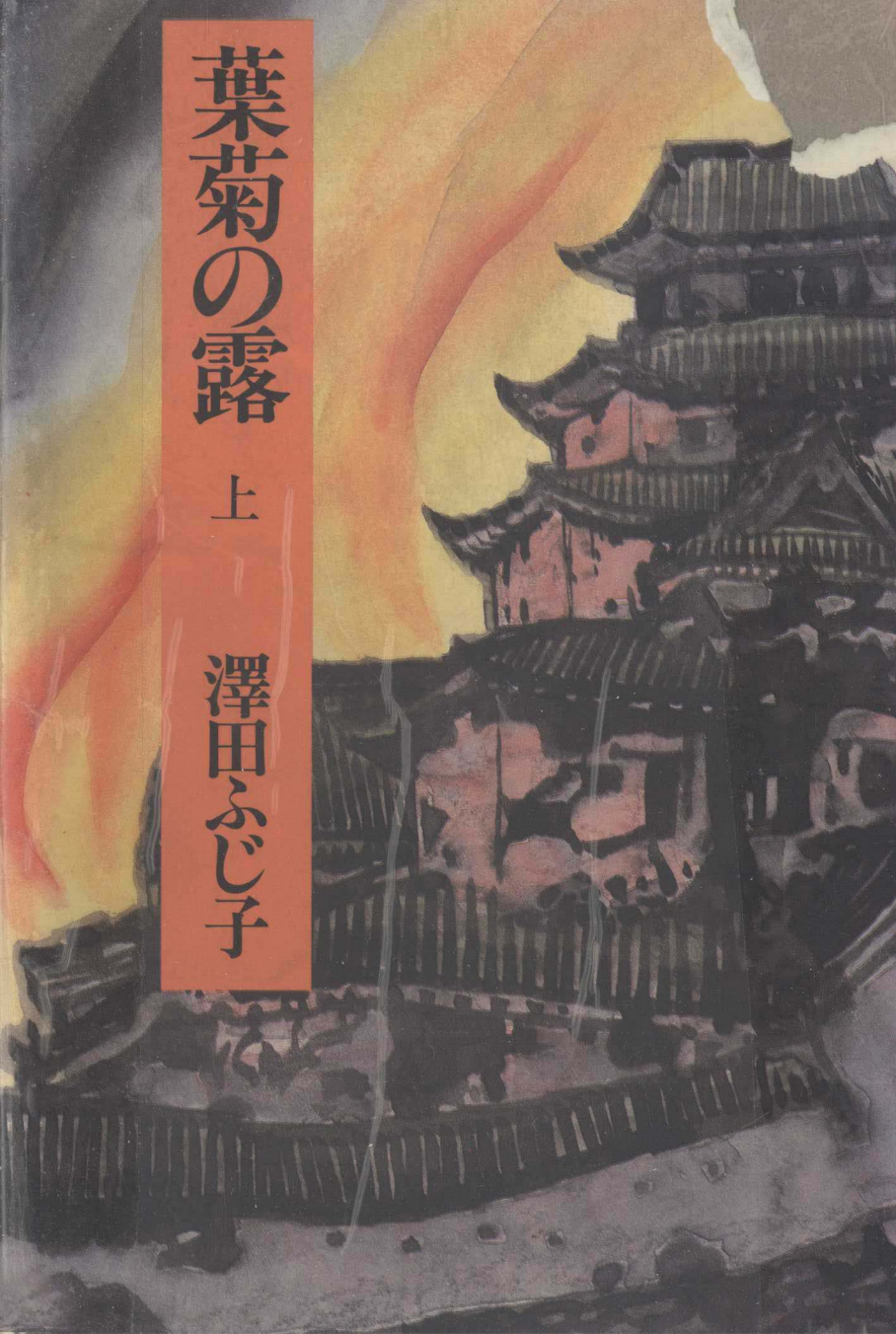


葉菊の露

上

澤田ふじ子



葉菊の露
上

澤田ふじ子

中央公論社

葉菊の露上

©一九八四 検印廃止

定価一四五〇円

昭和五十九年十月十五日初版印刷

昭和五十九年十月二十五日初版発行

著者 澤田ふじ子

発行者 嶋中鵬二

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八一七

振替東京二二三四

ISBN 4 - 12 - 001346 - 4

葉菊の露 上 目次

雪の匂い	5
戊辰の月	34
離　　春	72
辛酸の門	112
小山戦争	152
夏の翳り	199
はぐれ狼	239
会津籠城	277
悲の碑	320

装帧·插画
加藤正音

葉菊の露

上

雪の匂い

清冽な水が、川石をかんで流れている。

まわりはしたたるような緑であった。

岐阜から関市をへて美濃市に入り、道の左右に長良川が転じるのを眺めながら、山裾をぬうようにして進む。北にむかうこと約一時間、ようやくたどり着いた郡上八幡（じょうはちまん）である。

四方を山にかこまれた町は、長良川に水をそそぐ吉田川の河岸段丘にいとなまれ、幕末から明治のおもかげを残した町並みが、山紫水明のなかに、ひっそり息づいている。

町のどこに立っても、水の音と匂いが鼻につき、吉田川の右岸にそびえる積翠山（せきすいさん）がみえ、山頂に薨（い）をおく八幡城が遠望できた。

城のふもとには、殿町、大手町、柳町、職人町など、いかにも城下町らしい町名がならび、左岸にひろがった町に入っても、左京町、大阪町、榊形町などの町名が目についた。

まぶしい初夏の陽に射られ、軒のせまった町筋を歩く。格子づくりの古い家が、いたるところにみかけられ、人のもの言いもどこかひなびて、耳に快くひびいた。

この町や長良川上流の郡上川は、いまの季節、鮎漁がさかんであり、そしてまた、「郡上おどり」でにぎやかになってくる。

昨年（昭和五十八年）の八月、孟蘭盆会（もろぼんえ）のときだった。

わたしはこの山峡の町を訪れた。

吉田川左岸の旅館に数日泊まり、郡上おどりを見物してすごした。

郡上節にあわせて踊る郡上おどりは、全国の代表的な踊りとして知られている。起源は明らかでないが、芸能史研究は、風流踊りのながれをくむもので、江戸時代初期、郡上領主遠藤左馬介が、人心の融和をはかるため奨励したのにはじまるといっている。

孟蘭盆会の四日間、郡上おどりは、新町橋から本町通りを中心にして最高潮に達し、夜を徹してのものになる。

人口二万ほどの町は、この数日にかぎって、三倍にも四倍にもふくれあがり、郡上おどりに魅かれた人々が、遠くは三重や静岡から、自動車を走らせて踊りにくるときかされた。

人出は昼すぎから増えはじめる。

奥美濃の山々に、闇が這（は）いかけるころ、小さな町は、ゆかた姿の人の波にびっしりとうまり、闇の色が濃くなるにつれ、音頭にあわせて手拍子をうって踊り狂う人の喧騒が、まわりの山々を夜明けまでゆるがせるのである。

わたしは自分の視線を、山峡の夜空から下に移した。

高い場所から、八幡の町を俯瞰（ふかん）してみる。江戸時代、近郷や近在の村々から踊りに馳せ参じてくる人々の姿を、空想したのであった。

「それ、もう踊りがはじまっている。あれはさば踊りのはやしじゃ。みんなもっとあわてんかい」
提灯ちようちんが闇のなかでゆれた。

山のはざまに点々と見えた明かりが、八幡の町に集まってくる。

城下の神社や寺の境内は、ますますにぎわいを加えてきた。

踊りの輪は、やがて熱狂に煽られ、町筋にくりだし、紅がら格子戸をあけて、人の顔がのぞく。
髪を桃割れにゆった娘が、すぐ輪のなかにとびこんでいった。

一晚中のにぎわいは、八幡城下の武家屋敷の人々の気持ちをも、そぞろにさせたことだろう。

郡上領主、遠藤左馬介は、土農工商の融和をはかるため、踊りを奨励したが、元禄十年、出羽
上山藩から当地に移封してきた金森氏は、宝暦八年、同家が「郡上宝暦騒動」で改易になるまで
の六十三年間、盆踊り禁止令をたびたびだし、領民の軽佻浮薄をいましめた。

「人がつどうて、夜どおし踊るなどもってのほかじゃ。風儀が悪くなるうえ、一味同心して、僭せん
上の沙汰じょうたにおよぶやもしれぬ。かたく停止をいいわたせ」
というのであった。

この金森氏改易のあと、丹後宮津藩から移封してきた青山氏は、宝暦騒動後の領内たて直しを
はかる政策の一つとして、盆踊り禁止を緩和している。

それどころか、盆中でなくても、届け出しいでは、踊りをおこなうことを許可した。

だが家中の武士はこのかぎりではなかった。

文久二年に公布された「十五箇条の改革令」に、盆中踊り場所へご家中末々まで妻子並に召使
ひ等罷まかり候儀は、かねて御法度の儀につき、堅く相心得罷り越間敷候——と記されている。

このことは、当時、武士たちが藩家の禁を犯し、こっそり盆踊りに加わっていたことを、はからずも証明している。

わたしは、日没とともにじまった郡上おどりを、路傍の石に腰をおろして見とれていた。往古のさば踊りを改めた「春駒」がある。

猫の子、かわさき、まつさかなど、さまざまな題をつけた音頭が、かわるがわる踊られる。それぞれ曲にいわれがあり、春駒は畜産奨励の曲で、猫の子は、古く郡上地方には養蚕農家が多く、蚕を鼠に食われないため、どの家でも猫を飼っていたことに縁起をもっている。

熱狂して踊り狂う人々をながめながら、わたしはいつしか、踊りの列のなかに、いまはあるはずのない人の顔をもとめていた。

踊りのなかに、こっそりまぎれこんだ青山家中の侍や小者の姿を、さがしていたのであった。斎藤造酒之助、尾嶋左太夫、白岩源助、牧野平蔵、小者の久七や小三郎——といった人々の顔が、ゆかた姿の男たちの顔に重なった。

彼らは幕末、会津戊辰戦争のおり、郡上藩青山家四万七千石の命運と信義をにない、若松城にたてこもった脱藩者「凌霜隊」の人々なのである。

凌霜隊——は、りょうそうたいと読む。

藩主青山氏の家紋は、葉菊の紋（菊立柏紋）だった。葉菊は霜を凌ぐところから、不撓不屈の精神を象徴するとして、凌霜隊の名がつけられたという。

脱藩者の総勢は四十五人。うち三十九人が武士、六人が小者であった。三十九人の内訳は、五十代が一人、四十代九人、三十代が十人、二十代十七人、十代二人となっている。平均年齢は二

雪の匂い



十七・四歳という若さだった。

この物語は、彼らが生涯の辛苦に出発する五カ月あまり前から始まる。

当時、時代は大きく転換しつつあった。

慶応三年十月十四日、將軍徳川慶喜は大政奉還の上表を提出し、翌十五日、聴許の御沙汰が下されている。

だが、京都朝廷に大政は奉還されたものの、朝廷も徳川幕府も、今後、どのような政治体制をとればよいのか、はっきりした構想をもっていなかった。朝廷は政治の最高権力をにぎっただけで、それを運用する政治的能力に欠けていたのである。

朝廷、幕府、討幕派諸藩は、徳川慶喜に政治を再委任するか、それとも諸侯会議によって運営するか、もしくは武力で倒幕を果たし、新政府を樹立するか、それぞれの思惑に応じて、さまざまな動きをみせていた。

朝廷は大政奉還を受理した当日、国是を議定するため、十万石以上の諸侯に、十一月末日を期限として上洛を命じ、さらに二十一日には、十万石以下の諸侯にも召集を発した。

徳川慶喜は大政奉還につき、十月二十四日、征夷大將軍辭職を願いでている。

政治的能力に欠ける京都朝廷は、さすがに狼狽した。二十七日、二条城に摂政二条齊敬なりゆきを、勅使としてやり、慶喜に従来どおり將軍職にとどまれと命じてきた。

「こうあらねばならぬ——」

徳川慶喜は内心でほくそえんだ。

京都朝廷のよびかけで、諸侯會議が開かれても、諸侯は自分に遠慮するだろう。會議は当然、自分の言に左右される。

結果、政權は実質的に徳川氏に帰納する。

かれは名をすて、実をとったのであった。

だが、奇妙なことに、諸侯はさっぱり集まらなかった。多くは当主の病氣や幼少を理由に、召命を辭退するか、召命延期を願ひ、明確な意志表明をさせた。

かれらは朝廷を甘くみて、敬遠したのだ。同時に、慶喜の胸中を推察しなかった。

政權の実質的掌握は、まだどうなるかわからない。徳川家がこのまま倒れるとは、とうてい考えられなかった。日和見ひよりみをして、時をかせぐ考えだった。

こんななかで、郡上藩は、他藩に先んじて素早い反応をみせた。

すなわち、二十一日に上洛の召命をうけると、二十八日、はやくも召命に応えたからである。明石藩、赤穂藩につづいて、三番目の速さであった。

多くの藩が情勢をうかがっていたといっても、近畿周辺の小大名をはじめ、彦根、福井、安芸、薩摩など九十九藩が、藩主上洛のほか、召命延期を願ったり、また代理入京を果たしている。

二百六十余諸侯の約四割が、京都出役にいちおう応えたことになった。

郡上藩の筆頭国家老鈴木兵左衛門は、召命の使いを、京都留守居役江村監物からうけると、次席家老佐治八右衛門、用人坂田林左衛門、御使役五十石斎藤造酒之助のほか、わずかな供廻りをしたがえて、すぐ上洛の途についた。

郡上藩の家老は、江戸詰家老として朝比奈藤兵衛、貴田源太左衛門、天方刑部左衛門がおり、国許には鈴木、佐治兩人のほか、小出孫左衛門、下津太郎左衛門の七人がいた。

城下はずれの中野村まで、小出、下津兩家老が、鈴木兵左衛門を見送った。

山々に雪はまだなかったが、空は鉛色をおび、蕭殺しょうぎつとした光景が、まわりにひろがっていた。

「では行つてまいる。わしが国許を留守にするあいだ、ご兩人には、くれぐれもあとのことを頼みまするぞ。何事なりとも早馬か早飛脚をもって、京屋敷に知らせてもらいたい」

鈴木兵左衛門は沈痛な顔付きでいった。

昨日、かれは城内大広間に、家中の士を召集して、嚴重にいいわたしている。

当郡上藩だけでなく、いま諸藩は、佐幕か尊王を選ぶかの二者択一にせまられている。政局の帰趨ききうをみあやまれば、藩地を失うことになる。家中では佐幕、尊王の論をつつしき、市中の治安を図り、人心の動揺をまねくことのないようにと、堅くもうし付けたのである。

藩主青山幸宜ゆきよしは江戸にあった。

文久三年八月、前藩主幸哉ゆきしげが、病氣のために隠居し、幸宜は八歳で家督をつぎ、当年十三歳に

なつたばかりだ。むつかしい政局に、判断をくだせる歳ではなからう。

江戸詰筆頭家老朝比奈藤兵衛は、佐幕一辺倒の人物だった。それはかれが、井伊直弼なおすけの口ききで、近江彦根藩の重臣椋原家むくはらから、朝比奈家へ養子に入ったことにもよる。加えて江戸に常住すれば、おのずとそうなった。

前藩主幸哉が、奏者番、寺社奉行をつとめ、幕閣にふかく関わってきただけに、なおさらであった。

朝廷の召命をしらせる使いは、国許だけでなく、江戸屋敷にもいつている。

江村監物から急使をうけた鈴木兵左衛門は、すぐ江戸屋敷に、藩主の上洛をうながす使いを走らせ、自分は一足先に上洛すると告げさせた。

郡上は山間僻地へきちにありながら、京都とは近距離にあり、いざ戦となれば、戦略的に重要な拠点になる。京都の動きは、江戸よりはやく伝わり、筆頭家老として鈴木兵左衛門は、選択をあやまれない懸崖けんがいに置かれていたのである。

優柔不断は藩家を危くする。

言葉にも悲痛な色にじんだ。

「兵左衛門どの、おあとは案じられまするな。家中の者もよくわきまえておりますれば、まさかのこともございますまい。われらも、しっかりお留守を預かるつもりでござる」

「しからば出立いたそう」

鈴木兵左衛門は佐治八右衛門にうなずいた。

徒歩の供をうながし、初冬の薄陽に照らされた街道を、遠ざかっていった。

四半刻（三十分）もすると、山の裾をまわり、見送りの人々の視界からふつつと消えた。

この日、奥美濃の山々に初雪が舞った。

兵左衛門は、五日後、京都に到着した。

すぐ六角通り油小路西の京都藩邸に入った。

「遠路、はやばやとご苦労にぞんじまする」

京都留守居役江村監物が、愁眉をひらいて出むかえた。

国許筆頭家老の上洛とあり、綾小路寺町西入ルに店をかまえる郡上藩御用達商人の菱田桑右衛門も、さっそく挨拶にやってきた。

「美濃のお国許とはちがい、近頃の京は、なにかとやかましゅうおす。八月からこのかた、外宮や皇太神宮のお札が、どこからともなく町中に降り、町人たちは太鼓までうち鳴らして、ええじゃないかと踊り狂い、えらい騒ぎでございます」

桑右衛門は、手真似をまじえて語った。

『岩倉公実記』は、神符天降について伝えている。恰もこの時に当たり、京師に一大怪事あり。空中より神符翻々と飛び降り、処々人家に落し、その神符の降りたる人家は壇を設けてこれを祭り、酒穀を壇前に陳らす。（中略）都下の士女は老少の別なく綺羅を衣て男は女装し女は男装す。群を成し隊を作す。ことごとく俚歌を唱ひ太鼓をうちもつて節奏をなす。（中略）八月下旬に始まり、十二月九日王政復古発令の時に至つて止む——と書いている。

神符天降は、政局の混乱をあらわしていた。

十一月十五日の夜には、坂本竜馬と中岡慎太郎が、京都見廻組の佐々木唯三郎らに暗殺され、

三日後の十八日、佐幕と勤王の意見のちがいから、新選組と袂^{たもと}をわかった禁裏御陵衛士隊の隊長伊東甲子太郎が、新選組によって、七条油小路で殺されている。

京都はとにかく、物情騒然としていた。

「ご家老さま、京都の情勢は、早飛脚で逐次お知らせいたしておりますが、かくのごとくでございます。今日のところは、いかがいたされますか」

一息ついたのを見計らい、監物が言葉をはさんだ。

外には闇がおりはじめていた。

「おおそのことじゃ。すぐさま太政官代に参上し、主君幸宜に代わり、国許から家老が入洛した旨をとどけさせてくれ」

鈴木兵左衛門は、居住まいを正して答えた。

鈴木兵左衛門の家は青山藩の譜代重臣であった。

代々が兵左衛門を名のって家老職をつとめ、かれで十五代に当たった。天保二年六月に生まれ、三十七歳になる。二年前に妻を失い、菩提寺の慈恩寺に、「貞琳院心月宗松大姉」と刻み、自分の戒名を入れる片側を空白にした夫妻墓を、たてたばかりであった。

実名は重睦^{じゅうもく}といったが、明治天皇御即位のとき、天皇の御名「睦仁^{むつひと}」と同じ字をもちいているのはおそれ多いと、重險^{しげたか}と改めている。

一番の運命を一身に担うだけあり、秀でたひたいと鼻梁に、智囊^{ちのう}の大きさがうかがわれた。

翌朝、兵左衛門を追うように、赤坂今井谷の江戸屋敷から、江戸詰家老朝比奈藤兵衛の発した急使が、京屋敷に到着した。